

近代の日本モーグルに関する考察

米澤 穂高

はじめに

21世紀に突入した今スキー人口は減少の一途をたどっている。フリースタイルスキーのモーグルも然りである。現在のモーグルは3D エアの解禁、コースの人工コブ化が急速に進みスピーディーでアクロバティックな競技になってきている。今のモーグルでは見てすごいと感じることは出来るが、一般の人がやってみようとは思にくい。このままではますますモーグル離れが進むのではないだろうか？このような中で日本モーグルはどのように変化し、未来へと進んでいくべきであるかを検証してみる。

まず本題に入る前にモーグルについての説明と歴史について紹介する。

モーグルについて

最初にモーグルについて説明する。「モーグル」とはノルウェー語で「コブ」という意味である。フリースタイルスキーの中の種目のひとつで、コブを滑りながら途中でジャンプ台を飛ぶエアを行い、なおかつスピードも要求される。オールラウンドな技術が要求される種目である。競技性、娯楽性を併せ持ったスポーツなので、滑り手、観客が楽しみを共有できるといった大きな特徴がある。近年では長野オリンピックにおける里谷多英選手

の活躍が記憶に新しい。斜度平均 26-31 度、幅 15-25m の 2 つのエア台を含んだコブのコースを滑り降りる。ターン 15 点、エア 7.5 点、スピード 7.5 点の計 30 点満点を減点法により得点をつけていく。予選、決勝の 2 本で勝負を決するシングルと、赤コース、青コースに分かれ同時に滑り勝敗を決め、トーナメント方式で勝ち上がっていくデュアルがある。図 1 図 2 これがモーグル競技の一般的なルールだ。

モーグルの歴史

次に歴史についてである。モーグルスキーの起源は 1960 年代のアメリカだと言われている。当時は「ホットドッグ」と呼ばれ、インストラクターやプロスキーヤーがデモンストレーションとして全米各地で行い、観衆の目を楽しませていた。従来と違う自由なスキーがこの種目のルーツとされている。1970 年代に入りカナダを中心に本格的な競技会が開催され始め、本格的に普及活動を開始。1976 年国際スキー連盟（以下 FIS）の承認を得て「フリースタイルスキー」として確立。これを受け競技規則、施設基準などの確立を図り、ワールドカップ、世界選手権、オリンピック等が開催されるようになり現在に至る。日本では 1960 年代、新しいスキー技術の存在を聞きつけたスキーヤーがアメリカから情報を収集

し、急速に広まった。1977年からは各地で個別の大会も開かれるようになった。FISの正式種目承認を受けて、1981年全日本スキー連盟（以下SAJ）が初めて全日本選手権を開催した。グローバル化の波がおしよせ、1988年日本でW杯初開催。1998年長野オリンピックにて人々に認知されるように2003年からは3Dエアが解禁になり現在に至る。

近年の日本のモーグル事情 - モーグル王国確立 -

次に近年の日本のモーグル事情についてである。競技的な視点を軸にして、日本のモーグル事情に迫ってみる。日本W杯初開催後徐々に認知度が高まり各地でより多くの大会が開催されるようになってきた。しかしながら、日本モーグルが飛躍的に進化し、世間に認知されるようになった最大のきっかけはやはり長野オリンピックである。W杯日本初開催当時はモーグル先進国であるアメリカ、カナダ、フランス、フィンランドにはとうていおよばなかった。しかし、1990年代に入り、自国開催でのオリンピックに向けて日本チームの強化が始まった。アメリカ人のスティーブ・フェアレンがコーチとして就任し、世界最先端の技術を取り入れた指導が始まり急速に世界に追いつき始めた。1996年W杯で日本人男子初の優勝。そして見事に自国開催のオリンピックで日本女子初の金メダリストが誕生した。しかしこれはモーグル王国に仲間入りするための単なる序章にしか過ぎなかった。その後2001年世界選手権デュアルモーグル男子優勝、ソルトレイクオリンピック女子銅メダル。この他にもW杯で何回も表彰台に立ち続けた。またW杯の観客動員数も他国と比べて断とつに高い。また、海外の選手か

らも日本開催のW杯は人気がある。その主な理由としては、観客が多いので燃える、お祭りのようだ、観光ができるからである。

これで名実共に日本がモーグル王国に仲間入りした。なぜこの短期間で日本はモーグル王国になったのであろうか。その理論としては(1)モーグル先進国のアメリカからコーチを呼び、アメリカチームのスタイルを模倣し、強化した。(2)マスコミがモーグルを採り上げ、モーグル関係者が一般スキーヤーにモーグル普及活動を展開した。(3)この結果モーグルスキーヤーの底辺が拡大し、モーグル界の底辺の底上げにつながった。この理論はまさしく「グローバル化」の理論と関連性がある。1980年代末に共産圏が崩壊して自由主義市場経済が支配した。そして、徹底した自由主義市場の下、世界基準化が進んだ。グローバルスタンダードの出現である。この世界基準が各国に浸透していき、世界の生活や文化が均質化してきた。これを日本モーグル王国の仲間入りの理論に当てはめると「自由主義市場経済の支配」が理論(1)で、「グローバルスタンダードの出現」が理論(2)、「世界の均質化」が(3)である。

近年の日本のモーグル事情 - モーグル王国衰退 -

しかしここでまた大きな転機がやってきた。それはエアのルール改正である。2002年まではエアを飛んだ際に足より頭を下にする技は禁止であったが、2003年からそのような技が解禁になった。これによりエアの難易度が格段に上がり、より高度な技術が選手に要求されるようになった。以前のモーグル競技は先ほどルール説明の際述べたようにターン点が全体の50%を占めている。ここからターン

重視の競技ということがわかる。アメリカコーチが就任した当時、最初に強化したものがターンである。なぜなら、全体の50%を占めているターンを強化することにより点数を稼ぐことができ、世界水準に追いつけると考えたからである。当然他国も同じような考えを持ち強化してきたのでターンでは差がつかなくなってきた。まさに「世界のターンの質の均質化」である。そこでFISが考えたのがエアのルール改正であった。これによりある程度煮詰まっていたモーグルの新たな可能性が広がった。やはりこれにいち早く対応したのはモーグル先進国のアメリカであった。日本は逆にこのルール改正を機にモーグル王国崩壊への道を辿っていく。その理由としては(1)先ほども述べたとおり、ターン優先のモーグル強化、(2)ソルトレイクオリンピック後のコーチの交代、(3)若手の強化不足。まず(1)についてであるが、王国を築いたスティーブはとにかくターンを優先に強化してきたため、エアの強化をターンほど重要視して強化してこなかった。この結果、ルール改正という新たなグローバル化の波に乗り遅れたため、他国との差が生まれた。次に(2)、(3)についてであるが、ソルトレイクオリンピック後長年コーチを務めていたアメリカ人コーチのスティーブからコーチとしては若手のカナダ人のドミニクへと交代した。日本チームの中心となる選手は長年変わっておらず、選手にはスティーブイズムが染み付いている。そのためドミニクのやり方になれるには時間が必要となる。また若手の強化に着手するのが世界に比べて遅れた。日本が中学生、高校生を中心としたジュニアチームを発足したのは2001年のことで、本格的に始動したのはつい最近である。このことから世界との差を感じる。これらが衰退して行った主な

理由である。モーグルにおけるグローバル化が進んだ際に底辺へも影響が及んだ。当然ながらこのような弊害も底辺へと及び、日本モーグル界全体が衰退したのだ。例えば、1998年の長野オリンピックの頃約300位存在していた草大会^{註1}も現在では100をきっている。また、道具についても同様のことが言える。板に関して言えば、当時100種類位あったものも現在では20種類位である。先にグローバル化において弊害もあると述べた。先ほどモーグル王国の確立とグローバル化の関連性があったように、ここでも日本モーグル衰退とグローバル化の弊害について関連性があるのではないだろうか。グローバル化の弊害を経済で例えてみる。例えばコンピュータ・ネットワークで世界の金融・株式市場がひとつに結ばれたため、ある市場での暴落が瞬時に世界に拡大したり、一瞬にして巨額の損失が発生するようになる。また、衣食住から娯楽に至るまで生活と文化が世界規模で均質化し、地域固有の産業や文化、価値観が崩壊しつつあること。このような市場原理によるグローバル化はさまざまな歪みをもたらすようになった。こうしてみると、やはり日本モーグル衰退とグローバル化の弊害について関連性があることがわかる。次に現在の日本のモーグル事情について年代別に分析してみる。

現在の日本のモーグル事情 - 幼少 - 小学生、中学生 - 高校生 -

まずは幼少 - 小学生、中学生 - 高校生についてである。この年代は科学的に分析してみるとモーグルをするにはまだ早いと考えられていた。なぜなら、この時期は体の成長が著しくある段階であり、モーグルの動きの特性上、

子供の成長をとめてしまうと考えられていたからである。このような理由でジュニアの強化が遅れてしまったともいえる。しかし、カナダへいってみると、世界中の子供たちが夏でも大人に負けないくらいのターンとエアでモーグルをしている。これに習い日本でも科学的に分析をして、子供の成長に弊害のないようにモーグルの練習ができるような環境、メニューなどが研究されて実践しつつある。先ほども述べたとおり日本のジュニアナショナルチームも2001年から始動し始めた。また中学生、高校生を対象とした全日本選手権のジュニア大会をやはり2001年から毎年開催している。最近では世界ユース大会でも上位入賞を果たし、着実に強化が進んできている。今ではジュニア専属のコーチが全国に存在している。なかでも体力測定における福島県のジュニア世代の選手たちの中にはナショナルチームを上回っている選手も見られる。また、草大会においても以前は存在しなかったジュニアの部が、現在では小学生低学年、高学年、中学生、高校生と細分化され、存在している。図3その大会数も多くなってきて、中にはジュニアのみの大会も存在する。大会数が減ってきている中でジュニアの部が存在する大会が増えてきている。このようなジュニアの強化はモーグル界の未来にとって非常に良いことである。

現在の日本のモーグル事情 - 大学生 -

次に大学生についてである。日本モーグルのキーポイントはここにも存在する。なぜならモーグルができる環境が整っていない大学がほとんどだからである。まず冬季のユニバーシアード大会、インカレの種目にモーグルが存在しない。そして、モーグルができる

部活、サークルがほとんどない。1998年当時はモーグルが流行っていたこともあり、モーグルサークルは全国にたくさん存在した。大学生だけの草大会にも全国から300人近く参加していた。しかし、2004年においてはサークルも減少して、大会参加者も半分の150人位である。2005年以降は開催するののままならないのが現状である。これはかなり深刻な問題である。モーグルの大会としてオリンピックや世界選手権、W杯の下に全日本選手権、国体が存在する。そしてジュニアの全日本選手権やユース大会が存在する。では、なぜ大学生の全国大会や世界大会は存在しないのだろうか。多くの他の競技や種目では存在しているにもかかわらずモーグルが無いのはおかしい。せっかくジュニア期に強化されてきた選手も高校まででモーグルを辞めてしまう人が多い。このカテゴリーではスノーボードに転向する者やモーグルよりも他のスポーツや事柄に興味を持ち、辞めていく者が多い。現代社会において大学スポーツ離れは深刻な問題のひとつである。私は現代の若者のモーグル離れの原因のひとつをここに感じる。これからは大学生のモーグル環境を改善していくことが必要だ。これが日本モーグル復活の鍵になる。具体的な策としては学生の世界大会、全国大会の実施、スポーツの一貫教育、地域との共存などである。

現在の日本のモーグル事情 - 社会人 -

次に社会人についてである。やはり社会人が日本のモーグルを引っ張っている。日本のモーグル人口で社会人の割合が最も多い。なぜならモーグルが日本に伝わった世代、モーグルが流行りだした世代が圧倒的にこのカテゴリーに存在するからだ。SAJの大会、草大

会を見ても 30-40 代の割合が非常に多い。しかしながら、やはりこのカテゴリーの人々も以前に比べるとモーグル人口が減少してきている。このように現在の事情をみても日本モーグルが衰退の一途をたどっているのが分かる。

日本モーグルのこれから

では、このような現状を打破するためにはどのようにしていけばよいのであろうか。日本モーグルのこれからについて分析していく。一番大切なことはモーグルを「一時の流行」で終わらせてしまうのではなく、野球やサッカーのように「文化」として確立することである。まず、モーグルという枠にとらわれずにスポーツをその国の文化として確立させるには何が必要か考えていく。(1) スポーツ本来の意味である楽しむことを忘れないこと。sport の語源はラテン語の *deportare* にある。de 離れる *portare* 運ぶという意味である。そこから英語の *disport*、di/dis 離れる *port* 港、運ぶ、仕事するという意味になり現在の sport に到る。仕事からはなれ自由になるという意味から厳しい仕事から解放されて、大いに遊び、楽しみ、時には戯れるとなった。すなわちスポーツとは「楽しむ」という意味である。その本来の意味を忘れてはならない。(2) スポーツと色々な分野が連携して、クロスオーバーさせながら発展していく。これは、例えばモーグルだからといってモーグルのことだけをトレーニングしたり勉強したりするのではなく、色々な分野のスポーツ、学問などを取り入れていくことにより、より発展していくことができるという考え方である。モーグル選手はコブを滑ってばかりいてうまくなれるわけではない。やはりこれからはトレーニングや勉強も科学的且つ総合的に取り組んで

いくとよりよい効果が生まれると考えなければならぬ。この方法で陸上の末続選手や水泳の北島選手をはじめ、近年、日本の多くの選手が成功してきている例がある。(3) 個人としてだけでなくチームとして強くなる。これは「個」というひとつのものを強化していき、その個同士が切磋琢磨し合い団体としても強くなっていくという考え方である。これは個人競技でも団体競技でも同じことが言える。個が最終的に集まって相乗効果を生み出すのだ。アテネオリンピックの水泳チーム、柔道チーム、体操チームがまさにこの成功例である。(4) ジュニアからシニアまで相互に連携しあって育成していく。図はアルビレックス新潟の例である。図 4 図にあるとおりピラミッド型の一貫した育成方法が意識の統一性や連帯感を生み出す。またそのスポーツを長く続けたいと思わせることができる。近年の多くのサッカーチームなどがこの強化方法で成功している。(5) 地域に根ざした総合型地域スポーツクラブを作る。「未来ある子供たちと地域の人々に夢と感動を与えられるような『ひとづくり』に貢献します。地域に根ざした『まちづくり』に貢献します。地域と世界を結ぶ『豊かなスポーツ文化の創造』を目指します。」(<http://www.albirex.co.jp/club/index.htm>) このようなコンセプトでアルビレックス新潟は運営されている。サッカーではシンガポールにも進出して大成功を収めているし、バスケットボールやチアリーダー、最近ではスキーチームを作りスポーツ間の相互乗り入れも実施している。このような総合型地域スポーツクラブを多く設立していく必要がある。この他にも(6) 施設、設備を充実させる。(7) 指導者の育成。(8) 勝利主義、商業主義に固執しない。このようなことがスポーツを文化として根付かせるのにまず必要なことではな

いだろか。この8項目がモーグルを日本の文化として根付かせるためにやるべきことにそのまま当てはまる。この他に以下の3項目が重要になってくる。まず第1にグローバル化に乗り遅れないことである。グローバル化に乗り遅れるとグローバル化の弊害をくらうことになる。すなわち、それはさらなる日本モーグル衰退を意味する。グローバル化に追いつくためにまずすべきことはその時代の流行をいち早く察知して取り入れることである。今のモーグルで言うならばエアの強化、ジュニアの強化、大学モーグルの環境の整備などである。そして第2に、日本独自の良さや特徴を見出し、それを活かすことである。日本らしさを取り入れることにより独自の発想からより良いものが生み出されるであろう。日本のサッカーのプレイスタイルが良い例である。ヨーロッパや南米の最先端のスタイルを取り入れながらも日本人の特徴を活かしたスピーディーなサッカースタイルを確立してきた。こうして日本サッカーは強くなってきた。以前の日本モーグルもこのようにしてグローバル化してきた。ただ日本らしさという面では足りなかったのかもしれない。第3に自発性である。やはりグローバル化の中で生きていくためには自発性が極めて重要である。この自発性は多くの日本人が兼ね備えていないものである。モーグルにおいても同様のことが言える。これからは自発性を構築していくことが必要だ。

まとめ

モーグル界にも変化の波が押し寄せてきた。第2の変革期を迎えた日本モーグルは、その波に飲み込まれ迷走をし始めそうになった。しかし、ここから先に進みださなければ

ならない。衰退する日本モーグルを復活させるにはどうすれば良いのか。以下のように簡単にまとめてみた。

- (1) スポーツ本来の意味である楽しむことをモーグルにおいても忘れないこと。
- (2) モーグルと色々な分野が連携して、クロスオーバーさせながら発展していく。
- (3) 個人としてだけでなく団体として強くなる。
- (4) ジュニアからシニアまで相互に連携しあって育成していく。
- (5) 地域に根ざした総合型地域スポーツクラブを作る。
- (6) 施設、設備を充実させる。
- (7) 指導者の育成。
- (8) 勝利主義、商業主義に固執しない。
- (9) グローバル化に乗り遅れずに流行をいち早く察知してそれに対応する。
- (10) 日本独自の良さや特徴を見出し、それを活かす。
- (11) 自発性を構築していく。

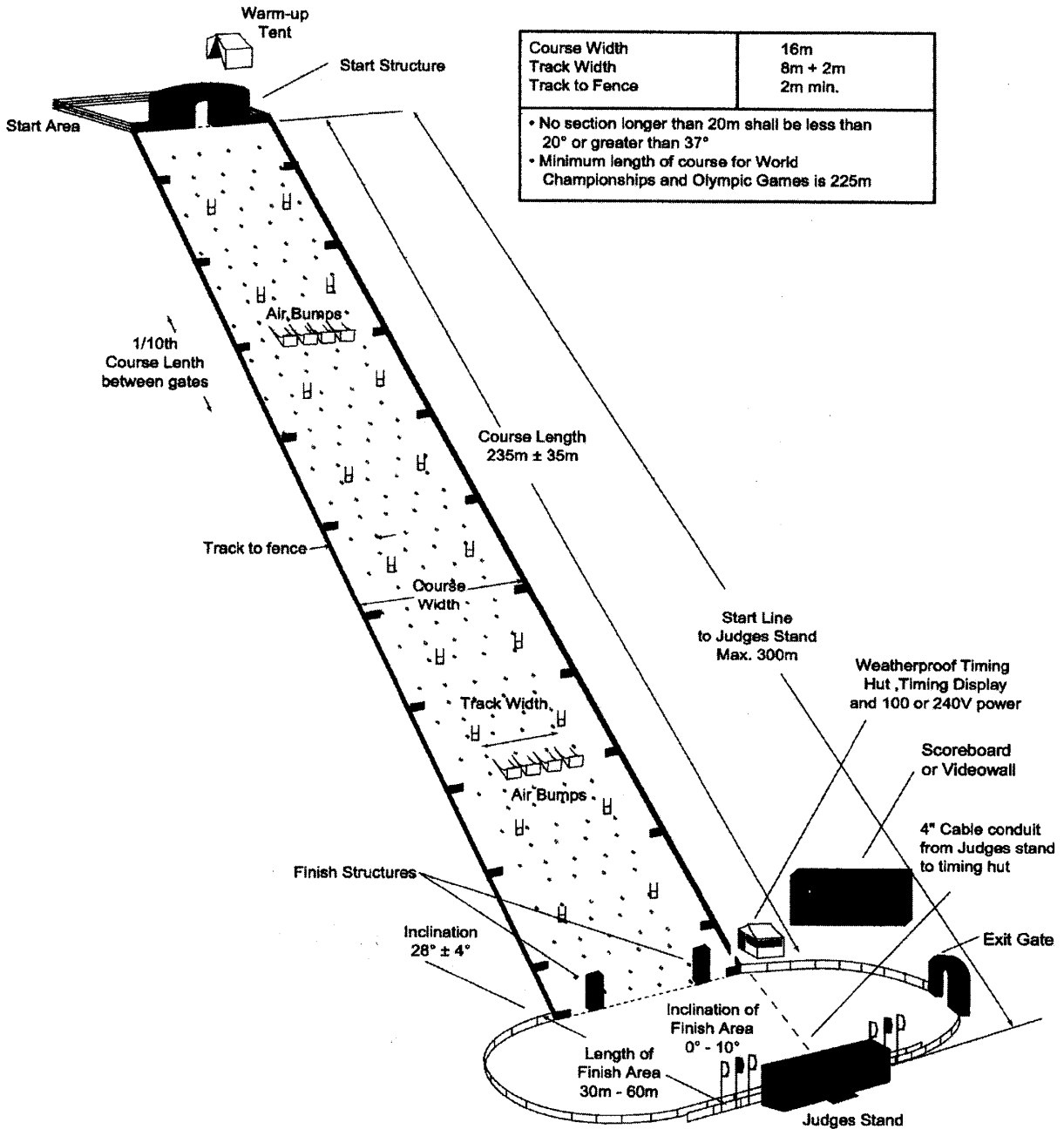
これらを組み合わせることにより世界水準に、日本らしさをプラスできる。それができたときに日本モーグルが復活するであろう。

注1 一般大会のこと。

図1 FIS W杯モーグルのコース図

FIS Moguls Course Specification - World Cup

Revision 03/10/2000 • FIS Freestyle Committee



Note: Diagrams are not to scale. All Angles shown are based on the 360° Scale

All cable conduits to be buried to prevent damage and have a continuous loop of draw rope installed to allow easy installation and removal of cables.

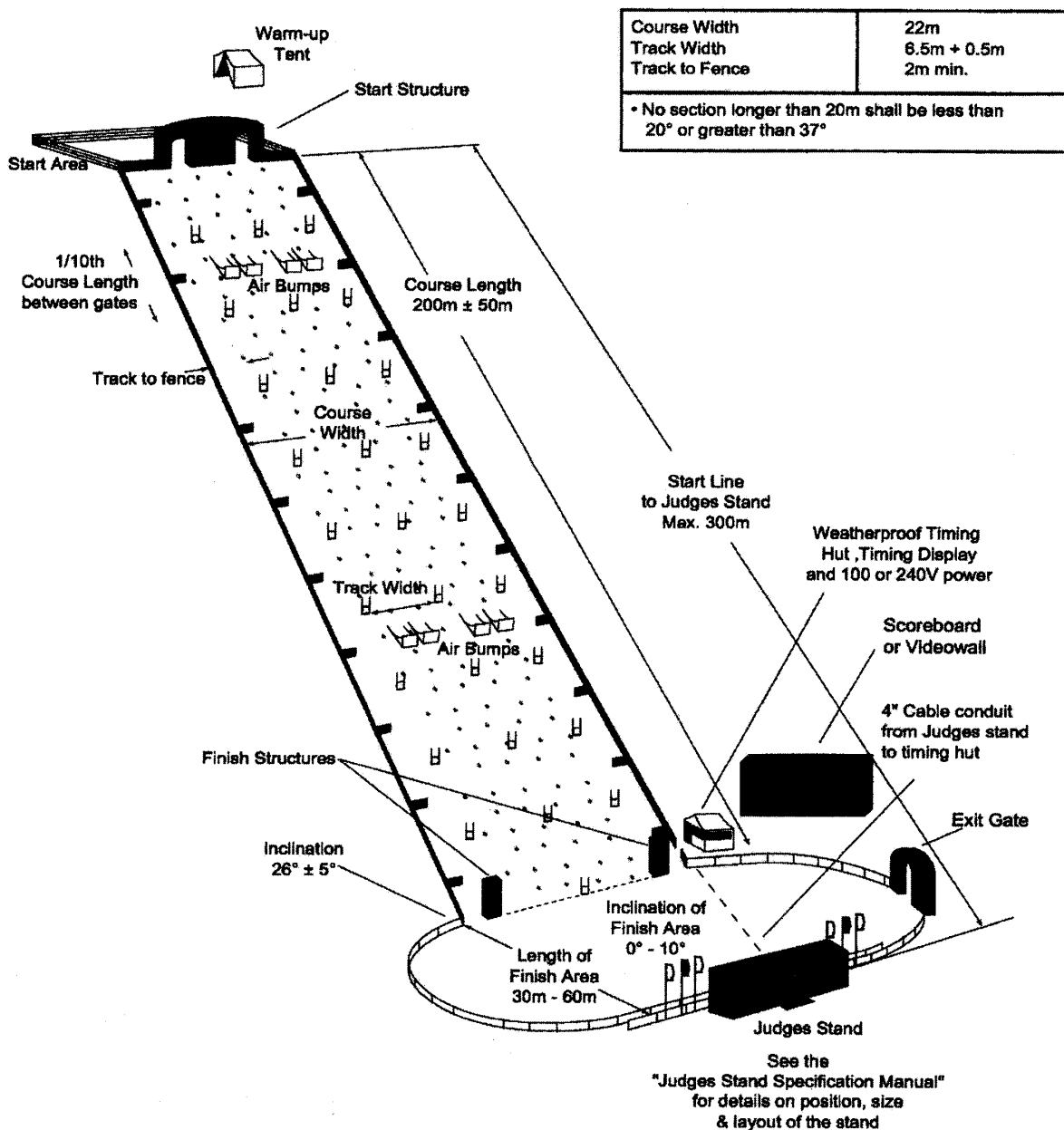
See the "Judges Stand Specification Manual" for details on position, size & layout of the stand

出所) FIS FREESTYLE WORLD CUP JAPAN SERIES RESULT

図2 FIS W杯デュアルモーグルのコース図

FIS Dual Moguls Course Specification - World Cup

Revision 03/10/2000 • FIS Freestyle Committee



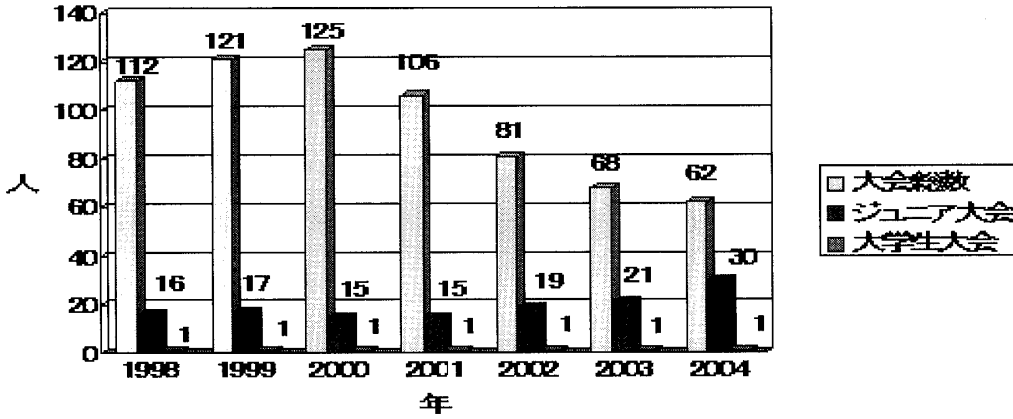
Note: Diagrams are not to scale. All Angles shown are based on the 360° Scale

All cable conduits to be buried to prevent damage and have a continuous loop of draw rope installed to allow easy installation and removal of cables.

出所) FIS FREESTYLE WORLD CUP JAPAN SERIES RESULT

図3 1998-2004シーズンの草大会総数とジュニアの部がある大会の数

1998-2004シーズンの草大会総数 とジュニアの部がある大会の数



参考資料 中島文夫編「ラボースキー[ザ・モーグル]」双葉社、1999-2005。

図4 アルビレックス新潟の組織図2004/10/16 <http://www.albirex.co.jp/>

新潟からの新たな挑戦
Starting Line 2004
アルビレックス新潟オフィシャルウェブ

下部組織・女子チーム ▶ 下部組織TOP ユース レディース スクール フットサル

将来のトップチームになりうる選手育成
草の根活動から世界を目指した強化活動
新潟の地域スポーツ文化に貢献します。

トップチーム
ユース
レディース
ジュニア
ユース
スクール

ユースチーム ▶
女子チーム ▶
サッカースクール ▶
フットサルコート ▶

▲ ページ

戻る

株式会社 アルビレックス新潟
〒950-0854 新潟市美咲町2丁目1番10号 TEL 025(282)0011 FAX 025(282)0013
Copyright(C) ALBIREX NIIGATA INC. All rights reserved.

<参考文献>

- 伴義孝『大学体育の改造』関西大学出版部、1988年。
大学体育研究会編『新版大学体育』犀書房、1991年。
余暇問題研究所編『現代人とレジャーレクリエーション』不昧堂出版、1997年。
中島文男編『theMOgUL!1 1999』双葉社、1998年。
中島文男編『theMOgUL!2 1999』双葉社、1998年。
中島文男編『theMOgUL!1 2000』双葉社、1999年。
中島文男編『theMOgUL!2 2000』双葉社、1999年。
中島文男編『theMOgUL!1 2001』双葉社、2000年。
中島文男編『theMOgUL!2 2001』双葉社、2000年。
中島文男編『theMOgUL!3 2001』双葉社、2000年。
全日本スキー連盟編『競技スキー教程 [フリースタイルスキー編]』スキージャーナル、2000年。
中島文男編『theMOgUL!1 2002』双葉社、2001年。
中島文男編『theMOgUL!2 2002』双葉社、2001年。
中島文男編『theMOgUL!1 2003』双葉社、2002年。
中島文男編『theMOgUL!2 2003』双葉社、2002年。
岡野進編『概説スポーツスポーツを学ぶ人のために―』創文企画、2003年。
中島文男編『theMOgUL!1 2004』双葉社、2003年。
中島文男編『theMOgUL!2 2004』双葉社、2003年。
2004/10/16 <http://www.albirex.co.jp/club/index.htm>
2004/10/16 <http://www.albirex.co.jp/club/gaiyo.htm>
2004/10/16 <http://www.albirex.co.jp/>
2006/ 8 /12 <http://www.bravoski.com/news/>
2006/ 8 /12 <http://www.kinchans.com/junkie/rule/4200.html>
2006/ 8 /12 <http://www.kinchans.com/junkie/rule/4300.html>
2006/ 8 /12 <http://www.mmd.co.jp/monohito/guro-barukatoha.html>
2006/ 8 /12 http://homepage2.nifty.com/project-x/mogul_1.htm
2006/ 8 /12 http://homepage2.nifty.com/project-x/mogul_2.htm
2006/ 8 /12 <http://www.kiwi-us.com/~selasj/jsc/japanese/bulletin/no107/bujp1073.htm>